

第26回 宗教倫理学会学術大会

The Twenty-sixth Conference of the Japan Association of Religion and Ethics

大会テーマ 「不在者」の倫理 Ethics of the Absent

◆2025年度研究プロジェクトテーマー「不在者」の倫理ー

「「不在者」の倫理」とは、小原克博氏の「不在者の倫理」に触発されたものである。ここでは、「過去および未来における不在者を記憶・想像することは、現在の存在者である我々に対し、具体的な倫理的責任を喚起させる」とされ、その基礎付けが行われていた。

「不在者」とは、字義通りには「その場にはいない者」を指す。したがって、かつてはいたが今はすでにいない亡くなった人や、今はまだいないがこれから生まれてくる未来世代という意味を含みうる。しかしながら、わたしたちは、今日の前にいる人の声に耳を傾けず、あるいは現在どこかで声をあげている人のことを知りながら、その事実から目を背けていることがある。情報化社会と言われる今日、わたしたちは溢れる情報を自らの都合に合わせて取捨選択している。それは時として、わたしたち自身が、「不在者」を生み出すことにもつながっているのではないか。

これまで当学会では、宗教における「自由」の問題、宗教から見た「公共圏」や「世間」について、さまざまな議論を行ってきた。一連の取り組みで明らかになってきたことの一つは、日本における「公共」とは、往々にして「世間」の別名であり、社会通念や生活習慣が、あたかも「世間教」として立ち現れるということであった。そこでは、相容れない価値観に生きる他者との平等で自由な議論の場は成り立たず、他者は他者としてではなく、自我の延長へと回収され、絡め取られてしまう。

さらに、自我の延長へと回収される他者は、今日、死者にまで及んでいる。もちろん、それは現代に限定されるものではないが、生者の奢りは、たとえば死者の「加工」というかたちで、現代に特有な問題として現れている。しかし、古来、先人たちは、死者との豊かな関わりを紡ぎ出し、それを伝えてきたのではないだろうか。

もっとも、対等で自由な対話が成立する場合はともかく、記憶や想像によって「不在者」の声に耳を傾けようとするとき、そこには常に恣意性がつきまとう。これは避けることのできないアポリアであるとも言えるが、だからこそ、このような主題については対話的な知恵が重要な意味を持つと思われる。そこで、2025年度は、「不在者」をキーワードに、対話的な知恵によって浮かび上がる倫理的課題について考察していきたい。会員の積極的な発表と議論参加を期待する。

* 小原克博「不在者の倫理ー科学技術に対する宗教倫理的批判のためにー」（『宗教と倫理』第16号、2016年）

日 時：2025年10月12日（日）

午前 8時30分 受付開始

午前 9時00分 開会

会 場：龍谷大学大宮学舎 清和館3階大ホール

第26回学術大会実行委員長

鍋島直樹（龍谷大学）

実行委員会

〒600-8268 京都市下京区七条通大宮東入大工町125-1 龍谷大学文学部
井上善幸研究室内

E-mail : staffs@jare.jp

宗教倫理学会ホームページ : <http://www.jare.jp>

協力 龍谷大学世界仏教文化研究センター応用研究部門
人間・科学・宗教オープンリサーチセンター

宗教倫理学会第26回学術大会プログラム

8:30 受付開始（龍谷大学大宮学舎清和館3階）

9:00 開 会

◆研究発表〔20分発表 10分質疑応答〕

司会：末村正代（千葉経済大学講師）

9:05～9:35

1. 奥山史亮（北海道科学大学准教授）

エリアードにおけるシャーマニズム研究と大戦の記憶

9:35～10:05

2. 林 研（岩手医科大学准教授）

宗教と陰謀論における信念の倫理

10:05～10:35

3. 山口隆介（聖泉大学講師）

カリクレスに抗して

～～*～*～*～*～*～* 休 憩 *～*～*～*～*～*～*～*

司会：那須英勝（龍谷大学教授）

10:45～11:15

4. 大田祐慈（広島県立大柿高校非常勤講師）

葬儀における祈願法

11:15～11:45

5. 釋 大智（龍谷大学非常勤講師）

浄土真宗における説教とハビトゥス

11:45～12:15

6. 佐藤啓介（上智大学教授）

死者との約束を守る義務は存在するのか？

ードレッセルとテイラーの所説を手がかりにー

～～*～* 昼休み（昼食は各自お取りください） *～*～*～*～*

◆IAHR報告会

13:15～13:45

宮本要太郎・末村正代・古荘匡義・井上善幸

～～*～*～*～*～*～* 休 憩 *～*～*～*～*～*～*～*

◆公開シンポジウム〔14:00～16:15〕

14:00～15:00 基調講演

不在者の力～スピリチュアルケアの視点から～

谷山洋三（東北大学教授）

～～*～*～*～*～*～* 休 憩 *～*～*～*～*～*～*～*

15:15～16:15 シンポジウム：

登壇者

谷山 洋三（東北大学教授）

山本佳世子（天理大学准教授）

岩井 未来（龍谷大学教授）

司 会

鍋島 直樹（龍谷大学教授）

16:20～16:30 記念写真撮影

16:35～17:35 会員総会

18:00～ 懇親会

研究発表要旨

1. 奥山史亮（北海道科学大学准教授）

エリアーデにおけるシャーマニズム研究と大戦の記憶

Eliade's Study of Shamanism and the Memory of the War

【発表要旨】

第二次世界大戦後、ミルチャ・エリアーデ（Mircea Eliade, 1907-1986）は、最高存在（天空神）に関する研究の一環として、最高存在に接触したりその声を聴いたりすることのできる人間に着目し、それをシャーマニズムに関する研究としてエラノス会議や国際宗教学宗教史学会において展開していった。その成果は『シャーマニズム——エクスタシーの古代技法』（1951年）としてまとめられた。本書の刊行は、宗教におけるエクスタシー技法を共時的に研究する宗教現象学者として、エリアーデが国際的に知られる契機となった。しかし戦後の研究テーマとしてエリアーデが上記を選んだことには、大戦期ルーマニアにおいて大天使ミカエルのイコンから靈感を得た「預言者」コドリャヌが牽引したナショナリズムの現象に向き合い、大戦の記憶を昇華したいという動機もあったのではないかと推察される。エリアーデのシャーマニズム研究を辿ることにより、一人の宗教学者が大戦の記憶を語り直そうとした姿を浮かびあがらせたい。本発表の試みは、大戦によって命を落とした同胞の記憶とどのように向き合ったらよいのかというエリアーデの試行錯誤に着目するものであり、大会テーマである「不在者」の倫理について考察するものでもある。

2. 林 研（岩手医科大学准教授）

宗教と陰謀論における信念の倫理

Ethics of Belief in Religion and Conspiracy Theory

【発表要旨】

社会に不安が広がると新宗教が盛んになるという説があるが、現在のコロナ禍以降の社会では新宗教ではなく陰謀論が活発化している。これは社会の世俗化の進行による結果と思われるが、ある意味では宗教と陰謀論に機能の重複があるということでもあろう。しかし一般に、（いわゆる「カルト」を除けば）宗教を信じることは道徳的に善とみなされず、陰謀論を信じることは悪とみなされる。この違いは直感的には当然であるものの、実際そのように認めうる根拠を示すことができるであろうか。陰謀論を間違いだと断ずるのは意外に難しいことであり、対象によって信じることの倫理的評価が異なるということの妥当性は自明ではない。このことについては、真理論の観点からも考える必要があるだろう。本発表では、宗教と陰謀論を対比しながら分析した上で、ジェイムズの『宗教的経験の諸相』を参照しつつ、宗教の独自性を明らかにしていきたい。

3. 山口隆介（聖泉大学講師）

カリクレスに抗して

Against Charicles

【発表要旨】

カリクレスはソクラテスに対し、プラトンの対話篇中最も挑発的な論争相手の一人である。登場する『ゴルギアス』でカリクレスは、正義は弱者が強者を縛るためのものだとする正義否定論を唱えると同時に「若者が哲学をするのは分かるがよい年をした人間が現実に取り組むことなく哲学にふけっているのは殴ってやるべきだ」と述べてソクラテスが哲学に勤しむことそれ自体を否定する。そして、欲望のままに生き人々を支配して欲望を満たす強者こそが幸福であると主張する。このカリクレスの主張と、技術と富の体系と力の体系だけで国際政治を語り、文系の教育や研究を軽視する現代のある風潮は重なる。

本発表は、カリクレスとソクラテスの対談を現代社会の文脈におき直して解釈し、現代社会の問題点について本質を思索し、かつ理解する手掛かりを求める試みである。また、発表者の本来の研究領域はキリスト教思想であり、キリスト教的文脈での解釈をさらに重ね合わせることも試みる。

4. 大田祐慈（広島県立大柿高校非常勤講師）

葬儀における祈願法

The Optative Mood in the Funeral

【発表要旨】

浄土真宗の葬儀で勤められる「帰三宝偈」は、冒頭に道俗の人が共に菩提心を起こすことを勧め、次に、あらゆる修行階梯の聖者に対する筆者善導の皈依が表明されている。そのなかで、仏の大悲心を学ぶものにとって、「請願遥加備 念念見諸仏（“Pussions-nous en être dotés infiniment et voir les buddha à chaque instant!”）」と、仏の加備（加護）と見仏体験のあることが祈願されている。仏訳者のデュコール氏は、主語の倒置を伴う文語的な表現（pouvoir→pussions: 一人称複数、接続法現在）で翻訳している。このような祈願/願望法（the optative mood）の純粋な用例はサンスクリット文献に見られるが、日常においても別れの挨拶（“Good bye (God be with ye),” “Adieu”, 「さ（あ）らば」）あるいは、お見舞いの口上（“(May) God bless you.”）に残されている。目の前の不在と束の間の別離は、必ずしも虚無ではない。むしろ、『阿弥陀経』をはじめとする経典が説くところの莊嚴に触れ、記憶の中で諸仏にまみえることは、不在者の知恵を通して世界を追体験する一例と言えるだろう。

5. 釈 大智（龍谷大学非常勤講師）

浄土真宗における説教とハビトゥス

Preaching and Habitus in Shin Buddhism

【発表要旨】

浄土真宗は教義上、明示的な生活規範や道德命令を欠くと評価されてきた。その一方で、妙好人や近江商人に代表されるように、顕著な倫理的人格が真宗信仰の文脈から育まれたことも否定できない事実である。本発表は、この逆説的な現象を解明するために、ピエール・ブルデュの「ハビトゥス」概念を手がかりに、説教が門信徒の判断やふるまいのあり方にどのような影響を及ぼしたかを検討する。ハビトゥスとは、特定の社会環境のもとで繰り返される経験を通して、身体に刻み込まれた思考や行為の傾向を指す。とりわけ、明治期の説教師・七里恒順の語りを取り上げ、それを聴聞した伊藤忠兵衛や浅原才市といった人物の信仰実践との内的連関に注目する。説教は、教義の伝達にとどまらず、感覚や身体に作用し、信仰に根ざした行為傾向を形成する文化実践なのである。宗教的語りが倫理実践の条件をどのように整えてきたのかを理論的・経験的に再定位することを試みる。

6. 佐藤啓介（上智大学教授）

死者との約束を守る義務は存在するのか？

—ドレッセルとテイラーの所説を手がかりに—

Is There the Obligation to Keep Promises to the Dead?:

Theoretical Considerations from Dressel and Taylor

【発表要旨】

私たちは、死者と生前のうちに交わした約束を守ることは、有徳な振る舞いであると考えている。そうした徳は、とりわけ宗教文化においては自明のものとされてきた。しかし、果たしてそれは「倫理的な義務」と言えるのだろうか。この問題は、たとえば生前にその人が指示した個人情報や死後にどう取り扱うかといった問題を考えたとき、優れて実践的な問いでもある。近年、死者との約束という問題をめぐって、それを守る義務を否定する論者A.ドレッセルらと、その義務を擁護しようとする論者J. S.テイラーらとの間でささやかな倫理的論争が展開されている。そこでは、権利論的なアプローチや「死の害の哲学」的アプローチ、社会行為的アプローチなど、複数からの検討がおこなわれている。本発表ではドレッセルとテイラーの所説を批判的に検討し、宗教内外において、死者という「不在者」を倫理的に配慮するための理論的論拠を測深することを試みる。

宗教倫理学会第26回学術大会テーマ 「不在者」の倫理 Ethics of the Absent

公開シンポジウム 14:00～16:15

基調講演 不在者の力～スピリチュアルケアの視点から～ 谷山洋三（東北大学 教授）

講演概要

死者のみならず、社会の中で弱い立場にある人たち、存在していても不在であるかのように追いやられている人たちをまとめて「不在者」と呼ぶならば、不在者や不在者を支援する人たちには何ができるのだろうか。人権運動家や社会起業家、社会福祉従事者などが主たる支援者であろうが、ここではスピリチュアルケアや宗教的ケアの視点、つまり臨床宗教師やスピリチュアルケア師の立場から考えてみたい。

いったん死者と生者に分けるならば、死者については宗教者や遺族などが代弁者となり、死者の言葉を伝えたり、想像したり、自分の思いを投影したりする際のエネルギー源を死者に求めている。そしてその力は、代弁者の声を聞く側も肯定的に受けとめざるを得ない雰囲気がある。その雰囲気とは、特定の文化圏において共有される宗教的ケアの前提と言えるものかもしれない。

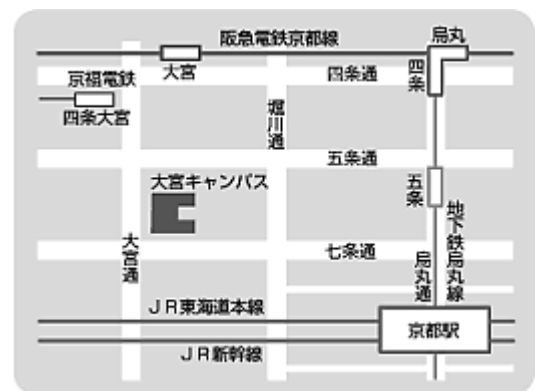
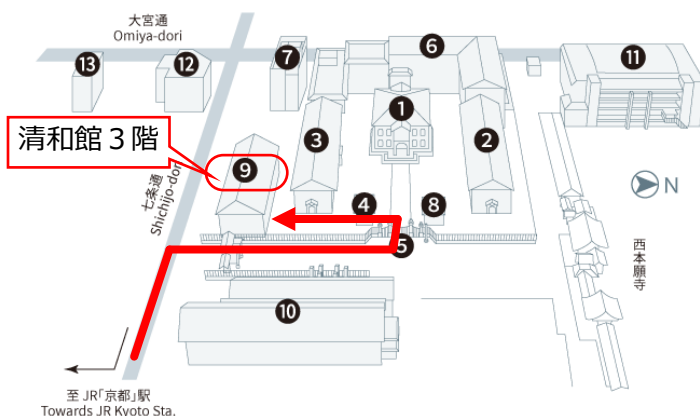
他方、生者については当事者の声こそが強い力をもつ。しかし、当事者は単独で声を上げるエネルギーを失っている。そのような場合にこそ、スピリチュアルケアという支援が必要である。これはよくある励ましとは異なり、基本的には傾聴によって当事者が見失ったエネルギー源を、当事者自身が（再）発見することを援助するケアである。

講師紹介

谷山洋三（たにやま・ようそう）

東北大学大学院文学研究科・文学部教授 広域文化学専攻 域際文化学講座（宗教学専攻分野）
東北大学大学院文学研究科博士後期課程（印度学仏教史学専攻）修了。専門は臨床死生学。2000年より03年まで長岡西病院ビハーク病棟にビハーク僧として勤務。四天王寺大学准教授、上智大学グリーンケア研究所主任研究員を経て、12年4月より東北大学大学院文学研究科准教授（実践宗教学寄附講座）。21年4月より現職（宗教学、死生学・実践宗教学兼任）

主要著作に、『医療者と宗教者のためのスピリチュアルケア 臨床宗教師の視点から』（中外医学社、2016）、『スピリチュアルケアを語る 第三集 臨床的教育法の試み』（関西学院大学出版会、2010）、『仏教とスピリチュアルケア』（共編著、東方出版、2008）など多数。



- ①本館(重文) ②北翼(重文) ③南翼(重文) ④旧守衛所(重文) ⑤正門(重文)
⑥西翼 ⑦西翼別館 ⑧守衛所 ⑨清和館 ⑩東翼 ⑪図書館 ⑫清風館 ⑬白亜館